

クリスチャンライフ、この麗しきもの（3）

イントロダクション

- (1) ここまでの確認
 - ①「あなたは救われていますか」という質問
 - ②聖書の救いとは、「神の怒り」からの救いである。
 - ③普遍的救いの教理は間違っている。

- (2) 何を信じるのか。
 - ①福音の3つの要素
 - ②これに別の要素を加えることは、福音を異質なものにすることである。

- (3) 信じたらどうなるのか。
 - ①聖霊のバプテスマ
 - ②新生
 - ③養子縁組

- (4) 将来何が起こるのか。
 - ①聖書が教える救いとは
 - *義認（過去形の救い。罪責からの解放）
 - *聖化（現在進行形の救い。罪の力からの解放）
 - *栄化（未来形の救い。聖化の完成）
 - ②前2回で義認を終えたので、きょうは聖化を扱う。
 - ③結局、このメッセージは4回のシリーズとなる。

このメッセージは、クリスチャンライフが、麗しいものであることを学ぶためのものである。

I. 多くの人が陥る罠（ロマ7：18～19）

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」

1. 最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。
 - (1) この理解は、クリスチャンを律法主義に追い込む。

- (2) やがては、信仰の休業状態に陥る。
- (3) 特に、儒教的背景のある日本人、頑張り屋さんの日本人はそうなりやすい。

2. 聖書が教える聖化とは

- (1) 義認も、聖化も、栄化も、すべて信仰により、恵みによる。
- (2) 頭の切り替えが必要である。これを「悔い改め」という。

3. この箇所は、パウロの体験が土台になっている。

- (1) これは彼が救われてからの体験である。
 - ①「私」という言葉が、18～19節だけで5回も出てくる。
 - ②彼は自分の体験を普遍的体験として語っている。
- (2) これは、パウロの時代のユダヤ人信者の典型的な姿である。
 - ①彼らは新生したが、解放されていない。
 - ②律法の下にいるが、聖霊の支配下にいない。
 - ③「旧約聖書のクリスチャン」
 - ④私たちは、「ロマ書7章クリスチャン」と呼ぶ。

II. それが畏である理由（ロマ7:8）

「しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです」

1. この聖句は、非常に重要である。

- (1) 「機会」という言葉が、罪と律法の間を良く説明している。
 - ①ギリシア語で「アフォルメイ」という。
 - ②これは、軍事用語である。
 - *base of operation（敵地に築く作戦基地）
 - *橋頭堡（bridgehead）
 - *上陸拠点（beachhead）
 - ③律法は、罪という敵が、人間の性質に侵入する時の拠点である。
- (2) 「むさぼってはならない」という戒めが与えられた。
 - ①罪という敵は、その戒めを橋頭堡にして、私の内に侵入した。
 - ②その結果、私はあらゆるむさぼりをするようになった。

③律法が命じることと正反対のことをしたくなるのが、罪の性質である。

Ⅲ. 罫から解放される方法（ロマ7：1～6）

1. 律法の大原則

- (1) 律法は、人に対して権限を持つ。
- (2) 律法は、死んだ人には権限を持たない。

2. 結婚関係の例話

- (1) 夫が生きている間は、結婚の律法によって制約されている。
- (2) それを破れば、姦淫の女と呼ばれる。
- (3) 夫が死ねば、結婚の律法から解放される。
- (4) 再婚しても、姦淫の女ではない。

3. 例話の適用

- (1) 信者は、律法に対して死んだ。
- (2) 今は、新しい御霊（聖霊）によって生きている。
- (3) もし今、律法による聖化を求めるなら、死んだ夫との関係が復活する。
- (4) 律法が働き始めるので、罪の性質が活発化する。

4. 私たちが置かれている状態

「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」

- (1) 福音を信じた瞬間に、私たちは新生した。
- (2) 聖霊の内住が与えられた。
- (3) 聖霊のバプテスマによってキリストと一体化させられた。
- (4) 以上のことが、私たちの新しい状態である。
 - ①「キリスト・イエスにある者」という言葉は、私たちの新しい位置を示している。
 - * 「キリスト・イエスに結ばれている者」（新共同訳）
 - * これを「位置的真理 (positional truth)」という。
- (5) これは客観的真理である。
 - ①主観的に罪の責めを感じる余地はない。
 - ②神との平和を得ているのに、主観的には自分を責めている信者の悲劇。
 - ③罪責感を強調するのは、神を助けようとする人間の愚かな行為である。
 - ④葛藤があるのは、救われている証拠である。

4. 位置的真理の重要性（ヨハ 15：5）

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」

- (1) とどまるとは、位置的真理を認識している人
- (2) 離れるとは、自力で聖化を求めている人
- (3) 律法に支配される理由はなくなったが、「肉の性質」に協力することがある。
 - ① 罪を犯す度合いは、信者によってそれぞれである。
 - ② しかし、信者が完全に「肉」によって支配されることはない。

IV. 将来の希望（ロマ 8：11）

「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください」

- (1) キリストの復活と信者の復活が関連づけられている。
- (2) 内住の聖霊は、復活の保障である。
 - ① 「あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください」
 - ② 終末的な意味での肉体の復活を意味している。
- (3) 三位一体の教理の暗示
 - ① 「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊」とは、「父なる神の御霊」。
 - ② 父なる神は聖霊によって、朽ちるべき私たちのからだを生かしてください。

結論：

（例話）開いた窓

- (1) 位置的真理
- (2) 私たちは、キリストにあって死に、葬られ、復活した。
- (3) 古い原則に死に、新しい原則によって生きるようになった。